

財閥銀行の海外展開と上海金融市場

—— 1913 年～1925 年 ——

The Zaibatsu Banking Group —— Mitsui, Mitsubishi, Sumitomo ——
in Shanghai Financial Market (1913～1925)

高 嶋 雅 明

Takashima, Masaaki

ABSTRACT

World War I had provided significant trading opportunities for Japanese economic growth. Overseas trade spread and foreign currencies accumulated. To take this extraordinary opportunity, the zaibatsu banking group —— the Mitsui Bank, Mitsubishi Bank and Sumitomo Bank —— opened branches in Shanghai. These banks not only operated the zaibatsu business in Shanghai but also engaged in the foreign exchange deals.

After World War I, the zaibatsu banking group further enhanced their financial power through loans for manufacturing and dealing with trade transactions. Additionally these banks gained profits from arbitration of exchange between Shanghai and Dairen.

はじめに

第一次世界大戦期以降、日本の財閥銀行はその営業活動を外国為替業務にも拡大し、海外店舗を拡大していったが、その主な活動地域は中国、とりわけ上海であった。このころ、上海は「黄金時代」とも称されて、上海金融市場の拡大は著しく、外国銀行をはじめ中国系（民族）銀行の活躍も目立った。本稿は財閥系銀行であり、都市大銀行でもある三井・三菱・住友銀行の上海進出を第一次世界大戦期以降の日本及び中国の経済変貌のなかに位置づけ、これら大銀行の

上海支店の金融活動を「営業報告書」や同時代の調査報告を利用して、外国為替金融と日系企業への融資活動の側面から明らかにすることによって、以下の課題に接近しようとするものである。

近年、植民地銀行研究にも新しい展開がみられはじめた。植民地銀行の金融活動を植民地支配・被支配関係のもとでの通貨発行権の独占や資本輸出の問題から接近することなく、むしろ、それ以外の外国為替金融や通常の銀行業務の展開にも目を向け、植民地銀行間の競争と淘汰、あるいは、現地における在来ないし近代的（移植）金融機関との競争・併存・補完関係の分析が企てられるにいたった。⁽¹⁾ 本稿の主題に限っても、香港上海銀行の内部資料に沈潜しつつ、上海金融市場や「植民地銀行」を分析した濱下武志・安富歩らの研究があり、中国における新式（近代）銀行群に焦点を当てた研究もでて⁽²⁾いる。また、伊藤正直は第一次世界大戦期以降の日本の対外金融と金融政策を論じた著書のなかで、財閥銀行群の上海金融市場への進出とその役割について言及している。中国へ進出していった日本の銀行群を支配・従属関係を強めようとする植民地銀行的側面にとどまらず、内外の金融関係が展開するなかでどのような役割を果たしつ

(1) 加藤俊彦編『日本金融論の史的研究』（東京大学出版会、1983年）第六章植民地金融、波形昭一『日本植民地金融政策史の研究』（早稲田大学出版部、1985年）など。以下、紙幅の都合もあり、注記はできるだけ省略に従った。

(2) 西村閑也「英系国際銀行とアジア」(1)～(4)『経営志林』40-2・4, 41-2・4, 2003年7月～2005年1月、永野善子『フィリピン銀行史研究——植民地体制と金融——』（御茶ノ水書房、2003年）、濱下武志「通貨の地域性と金融市場の重層性」（佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』山川出版社、1996年、所収）など。

(3) 濱下武志「19世紀後半、中国における外国銀行の金融市場支配の歴史的特質——上海における金融恐慌との関連において」『社会経済史学』40-3, 1974年10月、ほか。

(4) 安富歩「香港上海銀行哈爾濱支店」『現代中国研究』4, 1999年3月、同「香港上海銀行の資金構造」『アジア経済』44-10, 2003年10月、肅文嫻『清末中国経済と国際金融』（京都大学博士論文、2000年7月）。

(5) Linsun Cheng, *Banking in Modern China—Entrepreneurs, Professional Managers, and the Development of Chinese Banks, 1897–1937*, USA:Cambridge U.P. 2003, Zhaojin Ji, *A History of Modern Shanghai Banking—The Rise and Decline of China's Financial Capitalism*, USA: M, E.Sharpe, 2003. 後掲の注(37)も参照のこと。

(6) 伊藤正直『日本の対外金融と金融政策 1914～1936』（名古屋大学出版会、1989年）。

つあったかを分析する必要もあると考える。⁽⁷⁾

1 第一次世界大戦以降の貿易拡大と外国為替金融

第一次世界大戦の勃発以降、日本の外国貿易は急激に拡大し、外国為替金融も膨脹した。外国為替金融の担い手である横浜正金銀行がその業容を大きく拡大させたのは言うまでもないが、台湾銀行が外国為替金融で一定の位置を占めるに至り、また、財閥銀行の同市場への参入が進み、逆に、それまで日本国内の外国為替金融取引で一定の役割を担っていた外国銀行の地位が大きく後退した。⁽⁸⁾

このことは夙に指摘されているところであるが、伊藤正直は東洋経済新報社編『金融六十年史』が示す銀行別外国為替取扱高（元は『東洋経済 銀行号』『東洋経済新報』第1045号付録、大正12年4月14日号）が全く信頼できないことを指摘して、改めてこの時期の銀行別外国為替取扱高を検討・集計し直した。⁽⁹⁾ それによっても概ねの傾向は変わらず、1920年代にはいって、台湾銀行の比率の激減と横浜正金銀行の地位の後退が続くなか、普通銀行の比重が急速に高まっていたことが示されている。

表1は第一次世界大戦期をはさむ前後の年次の大銀行の海外店舗状況を示したものである。外国為替銀行有力3行は、いずれも大幅な店舗増をみせているが、横浜正金銀行・台湾銀行では中国以外のアジア地域での店舗展開が目立ち、朝鮮銀行は「満州」での店舗が圧倒的に多かった。そして、三井銀行・三菱銀行・住友銀行は第一次世界大戦前では海外店舗を持っておらず、1922年末の姿も大戦前の台湾銀行・朝鮮銀行に及ばなかった。もっとも、上記3銀行の店舗展開は中国地域に限らず、北アメリカ・ヨーロッパにも及んだが⁽¹⁰⁾、1928年末で

(7) 本稿では「本邦銀行関係雑件」（「外務省記録」3・3・3、外交史料館所蔵）その他の資料に拠るところが大きい。なお、横浜正金銀行・台湾銀行・朝鮮銀行の外国為替金融については全く言及していない。別途の課題としたい。

(8) 『東洋経済 銀行号』（『東洋経済新報』第1045号付録、1923年4月14日号）

(9) 注(6)および、伊藤正直「対外金融の構造——1920年代の外国為替・貿易金融に関する予備的検討——」（安藤良雄編『両大戦間の日本資本主義』東京大学出版会、1979年、所収）。

表1 大銀行の海外支店・出張所

地域別	1913 年末			1922 年末					
	横浜 正金	台湾	朝鮮	横浜 正金	台湾	朝鮮	三井	三菱	住友
中国	14	7	4	13	8	20	1	1	2
うち「満州」	8	—	4	6	—	16	—	—	—
その他アジア	2	1		8	6				1
ヨーロッパ	1			3	1			1	1
北アメリカ	4			5	1	1	1	1	3
南アメリカ				2					
その他				2		2			
計	21	8	4	33	16	23	2	3	7

(注)『東洋経済 銀行号』(『東洋経済新報』第1045号付録, 大正12年4月14日号)。

三井銀行5店舗・三菱銀行3店舗・住友銀行7店舗(外に連系銀行2行あり)であり, 三井銀行の海外展開が目立った程度で, 外国為替取引の拡大は海外店舗の増加を必ずしも意味していなかった。

財閥銀行の外国為替業務は第一次世界大戦前から始まっていた。三井銀行は1913年7月, 外国課を新設し, 三井物産のインド綿花輸入業と結びついて外国為替業務を開始しており, その前提として1906年6月にパークレース銀行との為替約定を締結して以降, 広範な海外諸銀行との引受信用・為替契約の存在があった。中国地域に対する関心も高く, 1911年には投資と支店設置の可能性を
⁽¹¹⁾ 探る清国調査を実施しており, その際はこれらの業務は「国家的規模で行うべき」ものとされたものの, 1913年8月には外務省に対し中国各地の銀行預金高
⁽¹²⁾ 調査を依頼していた。超えて1916年10月の支店長会で頭取は海外支店設置の意図を表明し, 翌月以降, 本店外国課のほか, 横浜・大阪・神戸を始め各店で輸出手形の買入れ, 送金為替の売渡しを取り扱うにいたった。

✓(10) 各銀行に関する一般的記述は『三井銀行史』『三菱銀行史』『住友銀行八十年史』などの銀行史による。とくに注記を付さなかった。

(11) 小林忠太郎(三井銀行内)編『株式会社三井銀行清国出張員報告書』(同刊, 1912年)。

(12) 「本邦銀行関係雑件」三井銀行之部, 第1巻(「外務省記録」3・3・3・3-4, 外交史料館)。

1917 年 10 月、三井銀行は三井物産上海支店内に上海支店を設置した。当初、その業務は為替売買と代金取立・預金に限定されていた。第一次世界大戦終結後の 1922 年 3 月以降、ニューヨーク・ロンドン・ボンベイに海外営業店を設置して外国為替業務を拡大し、その 8 割はドル為替であったという。外国営業部が新設されたのは 1924 年 12 月で、26 年 8 月には横浜・大阪・神戸支店の外国為替業務を支店から分離して外国営業部の一元的統制の下に置くことにした。外国為替業務の軸は横浜支店とボンベイ・ニューヨーク支店及び上海支店で、横浜支店では欧米向け輸出生糸手形の買入れ、ボンベイ・ニューヨーク支店は印綿・米綿の日本への輸入手形買取や各国向け綿糸布輸出手形買取り、上海支店は T・T 為替（電信為替）・銀為替の売買や大連為替（後述）の出合取引などが主であった。

住友銀行は三井銀行より早く、1889 年 8 月に広島支店が横浜正金銀行布哇出張所と海外コルレス契約を締結しており、日露戦争直前の 1903 年 6 月には海外代理店を設置し、日露戦後には外国業務の研究を促す報告書がだされていたが、海外展開は第一次世界大戦勃発以後で、「オール住友として中国への進出を計画」し、主脳陣が中国各地を視察した。これらの動きに前後する 1916 年から 18 年にかけて移民送金と為替業務で積極的に海外進出するにいたった。上海支店は銀為替の売買を主とし、上海向け綿布輸出手形の取立業務、漢口支店は農産物輸出の為替業務、ボンベイ支店はインド綿輸入の為替業務に従事したが、住友銀行の為替業務は輸入取引に基盤を置き、海外の低利の資金を利用して輸入為替金融を行い、その決済に必要な資金を輸出手形の買取で賄うパターンであった。

三菱銀行（1919 年 8 月 15 日設立、それ以前は三菱合資会社銀行部である）の海外業務は第一次世界大戦期のことで、三菱商事の急膨脹による取引量の増大がその背景にあった。1919 年 10 月には外国課を新設（1923 年 3 月、外国部に昇格）した。⁽¹³⁾

(13) そのほか、横浜正金銀行・朝鮮銀行・台湾銀行の上海支店があったが、本稿でほとんど言及しておらず、詳細は省略した。

主要財閥銀行の外国為替取扱高の推移を表2で示した。ここで言う外国為替取扱高は各銀行史の記載に従っているが、売渡外国為替・買入外国為替・利付為替手形の各期売渡高ないし買入高の合計である。さきに言及した伊藤正直論文⁽¹⁴⁾の第3表「銀行別外国為替取扱高」は各銀行の売為替・買為替（いずれも「普通」「電信」「向」「受」を合算）の合計で示されており、普通銀行の項をみても表2の数値と一致しない。その差違は前者はカバーのために売買する電信為替取扱高を除外していることによるものとする。ちなみに、1922年の第百銀行で買入外国為替・利付為替手形・売渡外国為替の当該時期の取組高・売渡高合計 57,331 千円に対し、普通・電信及び「向ケ」「受ケ」の売為替・買為替合計の外国為替取扱高は 70,823 千円を示し、うち、電信為替取扱高が 27,193 千円

表2 主要都市銀行の外国為替取扱高の推移

	三井銀行		三菱銀行 外国為替 取扱高	住友銀行 外国為替 取扱高	安田銀行 外国為替 取扱高
	外国為替 取扱高	外為売買 差益			
	百万円	千円	百万円	百万円	百万円
1917 年	147	2,156	23	233	
1918 年	149	1,118	69	310	
1919 年	442	3,263	155	534	
1920 年	346	4,014	236	544	
1921 年	461	4,291	372	534	
1922 年	772	3,860	490	544	
1923 年	1,076	3,605	1,464	605	
1924 年	1,970	6,534	1,401	589	83
1925 年	2,852	5,013	983	705	51
1926 年	2,742	5,166	734	814	55
1927 年	2,340	4,527	1,302	811	66
1928 年	2,991	5,593	2,475	1,028	85

(注) 外国為替取扱高は買入外国為替・利付為替手形・売渡外国為替の合計である。
各行の『銀行史』, その他による。

と38.4%を占めた。⁽¹⁵⁾

表2に戻ると、1921年までは財閥銀行3行のなかでは住友銀行の外国為替取扱高が最も多く、1922年以降は三井銀行が最大となったが、年間取扱高は10億円に達しておらず、台湾銀行の三分の一以下にとどまった。もっとも、関東大震災の年である1923年以降には三井銀行、三菱銀行の取扱高が激増し、住友銀行のそれは低迷した。『三菱銀行史』に拠ると、震災復興需要や内外商社の小麦・砂糖・肥料・生ゴム等の取扱いの急増がもたらしたと記述されているが、商社を持つ三井・三菱とそれを持たない住友の差が各銀行の外国為替金融に反映したものとする。

2 上海金融市場の拡大

第一次世界大戦は中国経済を大きく変貌させた。中国の外国貿易額は1910年844百万両（輸出入合計）から1920年1,304百万両、1930年2,205百万両へと拡大した。⁽¹⁶⁾ 輸入（再輸出を除く）と輸出では一貫して輸入が多く、1924年には10億両を突破した（輸出のそれは1929年）。したがって、貿易収支も絶えず赤字で、1920年代には2億両以上の水準を維持しつづけた。また、1920年と28年を比較すると、輸入は1.5倍、輸出は1.8倍になっており、輸出の伸び率が高かったことを示している。地域別では日本・香港を含むアジア地域の比重が輸出入とも高い傾向は変わらなかったが（輸入で60%前後、輸出で69～66%）、日本と香港の比率は少し低下した。輸入では、日本・香港以外のアジア地域とヨーロッパ、輸出ではヨーロッパ、北米地域の伸びが相対的に高かった。また、港別貿易額では輸出入ともその5割前後が上海に集中していた。

中国民族資本（工業）も上海を舞台に、製粉・紡績・織布・製糸・鉄・セメ

✓ (14) 注 (9) による。

(15) 栗原一平『外国為替実践』（東京宝文館、1924年）52-3ページ。

(16) 以下、東京商工会議所『支那外国貿易統計表』昭和2年、3年版（1929年）、Hsiao Liang-lin, *China's Foreign Trade Statistics, 1864-1949*, East Asian Research Center, Harvard University, HUP, USA, 1974, による。

ント工業分野で急膨脹していった⁽¹⁷⁾。もっとも、紡織部門では「在華紡」の発展も著しく、1919年と29年を比較して、中国資本紡績工場の鍾数は889千鍾から2,386千鍾と3倍弱の伸びに対し、日本資本のそれは333千鍾から1,652千鍾と5倍に伸び、双方の格差は一挙に縮まった。織機台数では1919年と30年を比較して、中国資本が7,740台から15,955台と2倍の伸びにとどまったのに対し、日本資本のそれは11,879台から29,322台へ伸び、彼我の差は2倍近くに広がった。少し後の資料になるが、1933年調査で中国資本の紡織工場は上海28工場・江蘇省22工場はじめ総数88工場とあり、同時期の日本資本（人）工場は上海32工場・青島15工場・漢口1工場、あわせて48工場（「満州」を除く）であった。その他の工業分野の発展状況については省略に従うが、工業の地域別分布も上海への集中度が高かった。

外国貿易の拡大と工業の発展は金融市場を活気付け、新たな金融機関も簇生した⁽¹⁸⁾。中国における外国銀行を除く民族資本系の銀行の設立状況をみると、第一次大戦前の1909年から13年の5年間では、新設21行、停業（破綻・廃業等）15行と1913年末には6行が存続するのみであったが、大戦期の1914年から18年の5年間では新設35行、さらに戦後の1919年から23年の5年間では実に110行の新設がみられた。そののちも毎5年間で数十行から72行の新設があったという。もっとも、停業数も多く、さきの1919年から23年の5年間では77行を数え、この時期に設立された銀行の5か年間の残存率は3割にすぎず、極端な新設・停業ぶりであった。それでも第一次世界大戦期から1920年代にかけての銀行設立は際立っており、有力銀行の設立と拡充が相次いだ上海では「銀行の黄金時代」の到来とも言われた⁽¹⁹⁾。中国系銀行の乱設には旧来の票号（山西票荘）や銭庄（荘）からの転換も多かったと考えられるが⁽²⁰⁾、表3は中国金融市場における在来・近代別あるいは内・外国系の金融機関別資金力の推移をみたも

(17) 東京商工会議所『支那経済年報』昭和10年版（改造社、1935年）第3編第2章、ほか。

(18) 前注（5）、同前『支那経済年報』昭和11年版（改造社、1936年）第5編第1章、ほか。

(19) Li, pp113-114.

(20) 陳捷『近代中国伝統金融機関史』（国際書院、1998年）。

表3 中国金融市場における金融機関別資金力の推移

(千上海両, %)

	1894 年		1925 年		1936 年	
外国銀行	280,000	32.5	1,303,900	36.7	1,236,200	12.3
票 号 (山西票莊)	280,000	32.5		0.0	0	0.0
錢庄 (莊)	303,000	35.0	800,000	22.5	757,800	8.9
中国系銀行	0	0.0	1,453,700	40.8	6,930,700	77.7
計	863,000	100.0	3,557,600	100.0	8,924,700	100.0

(注) 資金力 (Capital Power) とは払込済資本金・諸預金・銀行券発行高の合計である。

Lisun Cheng, "Banking in Modern China", 2003, P241.

のである。ここでいう「資金力」は払込済資本金・諸預金・銀行券発行高の合計で、いわば運用可能資金量を表すものとする。表では世界大恐慌期以降の時期まで示されているが、第一次世界大戦期をはさむ 1894 年から 1925 年の間では、全体の資金量が 4 倍に増加するなか、中国資本（人）系の近代（新式）銀行の比率が一挙に増大していた。また、この時期はまだ外国銀行の比率も若干高まって 4 割近くを占めたが、つづく、1925 年から 36 年にかけて、全体の資金量が 2.5 倍に増えるなか、外国銀行は資金量で減退を示し、その比率は大きく低下した。中国資本系の近代銀行が圧倒的な比重を占めるにいたった。いま、民国 24 年 (1935) 版の『全国銀行年鑑』⁽²¹⁾によると、現存銀行（中国資本）数は 159 行を数え、種別では商業銀行 78 行を含む普通銀行が 135 行に達しており、地域別分布では上海が圧倒的位置にあり、本店数で全体の 38%、分支店で 11% を占めた。

別な資料に拠るが、中国における近代銀行数は 1911 年の 16 行から 1925 年には 158 行に増加し、普通（商業）銀行の発展を主導したのは、上海・天津などに本拠を置いた民間の有力銀行である「南部 3 銀行」「北部 4 銀行」と政府系 2 銀行であった。そのうち、上海商業儲蓄銀行や浙江実業銀行は外国為替金融にも

(21) 前注 (18) に同じ。

乗り出しており、上海商業儲蓄銀行はチャータード銀行の取引拒絶を撥ね除けるほどの勢いを持つにいたった。

上海開港以来、上海を拠点とする外国貿易取引や船舶の出入が激増し、それと前後として外国銀行の上海への進出がみられ、外国銀行は銀行券発行特権を獲得するとともに、中国政府の借款供与の当事者として、また、外国為替金融の担い手として上海金融市場を形成し発展させてきた。⁽²²⁾ 19世紀末には中国で21の外国銀行があり、101店舗を展開していたといわれるが、第一次世界大戦を契機に、アメリカと日本の銀行の進出が著しかった。外国銀行の主な業務は外国為替であり、それに関わって、為替の操作や外債の取扱、貿易金融がある。1916年7月に新たに発足した上海外国為替銀行組合には20行の外国銀行が参加しており、日本の銀行としては横浜正金銀行・台湾銀行・住友銀行・三井銀行・三菱銀行・朝鮮銀行の名前があった。

上海金融市場が19世紀半ばから、外国銀行を介してロンドン銀市場の影響を受けていたことについては、夙に指摘されている。⁽²³⁾ 第一次世界大戦期以降、先進諸国で金本位制への復帰が容易に進まない貨幣事情の変化のもと、中国における通貨の基本は銀であり、その銀の世界的価格の変動（金銀比価）によって、中国の為替相場が規定される状況は続いた。⁽²⁴⁾ かくして、上海の為替は各国の輸出入貿易や国際貸借によって動かされるばかりか、外国貨幣そのものの価値の騰落や世界の銀価格の騰落によっても動かされた。為替売買の当事者は外国銀行・新式ないし旧式の中国系銀行・輸出入業者・中国人投機者などであり、さきにも述べたように、外国銀行や新式銀行（中国）の役割が大きかった。横浜正金銀行はじめ上海に進出していった日本の諸銀行もこのような枠組みのなかで外国為替金融に従事した。

加えて、第一次世界大戦期以降、日本は朝鮮銀行を軸に「満州」を金本位制に

(22) Ji, pp141-163.

(23) 前注 (3) に同じ。

(24) 井村薫雄『支那の為替と金融』（上海出版協会, 1923年）、吉田政治『上海に於ける外国為替と金融』（大阪屋号書店, 1925年）、内田勝治『支那為替論』（巖松堂書店, 1925年）。

よって規定された円通貨によって支配することを強行した。⁽²⁵⁾ もっとも、横浜正金銀行の鈔票（旧一円銀貨を兌換準備として発行された）は関東州内における強制通用力を失ったものの、特産物取引や為替取引に独特の機能を発揮し、流通高も増加していった。「満州」における特産物取引が銀建てで取引される状況が持続するなか、金本位制に基をおく朝鮮銀行券（金円）が大連で流通することになって、大連・上海・日本間の為替三角関係が惹起された。⁽²⁶⁾ いま少し敷衍して説明すると、⁽²⁷⁾ 上海は最大の銀為替市場であり、中国において銀相場が最も割安な市場であり、他方、銀取引が制限されていた大連は特産物取引の季節には銀相場は上海より大きく割高となった。加えて、「満州」での朝鮮銀行金券の流通拡大は容易でなく、市場に滞留することになって、大連の銀相場を一層高めることになった。従って、上海で金円を売って銀を買い、同時に大連で銀を売って金円を買えば、その間に常に幾らかの利益を得ることになった。それを前提に差益を求めて「大連商人」（上海為替市場において、大連向けの為替の売買を専業とする特殊な投機筋の総称）が活躍し、上海の日本の諸銀行も大連向け金円為替を買うことは日本向け円売為替のカバーになるとして、彼らを相手に盛んに取引を行ったのである。

3 上海金融市場における財閥銀行

第一次世界大戦期に三井・三菱・住友銀行は相ついで上海に店舗を設置した。

(25) 前注 (1) の波形、前掲書、金子文夫『近代日本における対満州投資の研究』（近藤出版社、1991年）など。

(26) 同時代の解説・分析としては、南満州鉄道株式会社上海事務所『上海市場の円為替と満州の通貨』（上海満鉄調査資料第4編、1927年）、横浜正金銀行『大連を中心として見たる満州の金融、為替、貿易』（調査報告第66号、1927年）、満鉄調査課『大連を中心として見たる銀市場と銀相場の研究』（南満州鉄道株式会社、1930年）、山崎靖純『改訂増補 外国為替讀本』（立命館出版部、1940年）などを参照。そのほか、三井銀行編『支那為替投機業者論』（内山書店、1926年）、同『大連ヲ中心トスル上海日本間為替三角関係』（内山書店、1927年）、大連取引所銭鈔信託株式会社『大連銭鈔市場資料』（同、1934年）、満鉄経済調査会『上海銀元対日本円裁定相場表』（同、1934年）も重要である。

(27) 以下は、山崎、前掲書160-4ページによるが、より詳しい検討と分析については、安富歩「大連商人と満州金円統一化政策」（『証券経済』176、1991年6月）をみられたい。

住友銀行は同じ時期に漢口支店も設置したが、その折の申請書に添えられた漢口領事による本省宛ての店舗開設を是とする副申には、同地における輸出入貿易の拡大や在留日本人・商店の増加、さらには、ドイツ商人からの商権奪取をその理由として列挙し、拡大しつつある金融市場のもと、既設の横浜正金銀行や台湾銀行の利益を害することはないと断じていた。各銀行による上海支店設置の状況も同じようなことであったと推測させる。

外務省外交史料館に所蔵されている三井・三菱・住友銀行の「営業報告書」から、それぞれの上海支店勘定をみたのが付表1~4である。時系列で連続しておらず、また、極めて限られた項目を抜きだしたにすぎないが、それらを踏まえて各銀行の上海支店の活動状況を、まず、外国為替から検討する。

各銀行上海支店の外国為替取組み状況（付表4）は、三井銀行が圧倒的に多額で、1919年の年間のそれは3億円近くに達し、それは住友銀行の3倍、三菱銀行の5倍を示した。もっとも、三菱銀行はその後、急速に取組み高を増やし、住友銀行は相対的に小さかった。また、各銀行の売為替・買為替・利付為替の期末残高をみると、三菱銀行はいずれの項目も極めて小さく、他方、三井銀行は時折、巨額の残高を示したが、それは買為替・利付為替で著しかった。住友銀行は両者の中間に位置し、利付為替の残高は小さかった。三菱銀行の「営業報告書」は上海支店の景況報告で必ず為替取組み状況に言及しており、それによると、1919年10月~12月期では「当期金融ノ強調、銀塊ノ暴騰ニ依リ引続キ好調ヲ以テ進ミ、為替取引ノ増加ヲ始メ」とあり、翌年上期では「内地其他海外市場ニ於ケル金融硬塞ノタメ全地商況ハ沈衰シ、加フルニ銀塊相場ハ低落、為替相場ノ変動亦甚シカリシモ取引ハ漸次進展ヲ告ケ」と記し、それ以降も毎期のように「商況不振」を指摘しながらも、1921年・22年・23年には「外国為替取扱高」の増進を述べていた。もっとも、1924年下期では「海外貿易ハ銀ノ上騰ト綿花雑穀ノ豊作トニ因リ一般ニ其活躍ヲ期待セラレタリモ、兵乱勃発ノ為メ阻害セ

(28)「住友銀行支店設置認可ニ関シ稟請ノ件（外務大臣宛、漢口総領事瀬川浅之進）」（「外務省記録」3・3・3・3-7）。

ラレ…為替取扱高減少シ」と記し、外国為替取引組みの増減が景況の動向のみに従うものでないことを指摘していた。

各行の上海支店における外国為替の取引み先（地域）は枚数・金額とも日本が圧倒的に大きかったものの、三井銀行上海支店の通貨別売買為替取扱高をみると、1925 年中で総額 14 億 4000 万円（円換算）のうち、円為替が約 5 割・ポンド為替 3 割弱・ドル為替 2 割弱・ルピー為替その他が若干となっており、円為替がほぼ半分を占める状況は概ね変わらなかった。⁽²⁹⁾ 三井銀行上海支店の取引み先（地域）は他の銀行より多様で、同行の外国為替業務は多彩な展開をみせていた。表 4 は「或銀行」の為替取引相手をみたものである。⁽³⁰⁾ それによると、銀行と実需筋の取引は通貨の種類や売り・買いを問わず最大で 5 割、2 割以下の場合もあった。他は、他市場との裁定と投機業者・「大連商人」を相手としており、外国為替取引が実需（貿易・投資等）の動向と必ずしも連動するものではなく、外国為替銀行は裁定取引や投機取引を通じても利益を確保しようとしていたことが分かる。なお、ここで言う「大連商人」とは、前節で紹介した大連銭鈔取引所と上海為替市場との金銀比価の開きを利用した裁定取引を営み、大連向け円為替を売買するもので、1919 年・20 年には三井銀行上海支店だけで大連向け為替売買額は 4500 万円に達したという。「大連商人」の活躍は、1921 年 4

表 4-1 或銀行の或年の為替取引相手

(%)

		投機業者	他の市場 との裁定	当地外国 銀 行	当地内国 銀 行	実需用	大連商人	投機業者+ 大連商人
圓	売り	43	17	10	2	24	4	47
	買い	33	25	10	2	13	17	50
ポンド	売り	34	16	29	6	15		
	買い	28	12	35	8	17		
ドル	売り	22	17	30	11	20		
	買い	15	21	37	13	14		

表 4-2 或銀行の他の年の為替取引相手

(%)

		投機業者	他の市場 との裁定	当地外国銀行 及実需筋	大連商人	その他	投機業者+ 大連商人
圓	売り	37	21	33	5	4	42
	買い	35	28	28	8	1	43
ポンド	売り	15	25	51		9	
	買い	10	28	49		13	
ドル	売り	11	22	51		16	
	買い	15	21	37		27	

(注) 安富歩「大連商人と満州金円統一化政策」(『証券経済』第176号, 1991年6月) 86ページからの引用。もとの資料は, 三井銀行編『支那為替投機業者論』(内山書店, 1926年) 122-3ページである。前表も同じ。

月の関東庁告示で大連取引所(満州重要物産及び錢鈔の売買取引を行う)売買建値が従来の銀建から金建に改められるに至って一頓座したが, 特産物取扱い商人達の猛反発もあり, 再び銀建が復活し, 1924年以降の三井銀行上海支店で每期数千万円の取引額に達していた⁽³¹⁾。

つぎに, 各銀行の通常の銀行業務——預金・貸出金の動向——をみておきたい。

大戦末期・休戦(終焉)・戦後といった変動を示す1910年代後半から20年代前半の約10年間を变化をみても, 各銀行の動きは区々であり, 共通した動きを示していないようであるが, 諸預金勘定(残高)では, 三菱銀行上海支店が趨勢として拡大傾向を示し, 三井銀行上海支店の20年前後の動きは停滞気味であっ

✓ (29) 「大正十四年九月上海支店報告書」「昭和二年十月上海支店報告・営業概況」(『三井銀行史料』4, 日本経営史研究所, 1977年, 所収)。以下, 各行とも決算時の相場で円貨換算した数値を利用している。

✓ (30) 前掲, 『支那為替投機業者論』122-3ページ。

(31) 「報知付録」第2596号(1921年4月30日, 『三井銀行史料』6, 日本経営史研究所, 1978年, 所収)。

た。住友銀行上海支店は中間の時期の数値を拾えず、その動向は不明確であるが、その前後の時期では三菱銀行上海支店と相似た動きを示している。諸貸出では三井銀行上海支店が1919年末と25年末に1000万円前後を示し、その間の時期には大幅な変動を繰り返しながら、3銀行のなかでは最も高い水準で推移した。住友銀行は貸出重視で始まったこともあって、1920年までは貸出残高も多かったが、資料で確認できる1923、4年には激減している。三菱銀行上海支店は1924年末に200万円近くを示したものの、概ね低い水準で終始した。

各銀行の取引範囲をみると、三井銀行上海支店で1920年前後の諸預金口数は225口（1919年末）から359口（1921年末）で、うち、定期預金口数は9口から25口、当座預金のそれは141口から167口の間にあり、諸貸出では貸付・当座貸越を合わせても23口から6口ときわめて少なかった。当座預金では一流紡績会社・商社の預金が大部分で、定期預金ではそれらに加えて中国系銀行からの預金も多かった。また、貸出では三井物産・東洋綿花・三菱商事・日本綿花のほか、内外綿・日華蚕糸・上海取引所・大連取引所・朝鮮銀行上海支店が大口貸出先であった⁽³²⁾。

三菱銀行の取引相手も少数であり、同行の上海支店の預金貸出業務は極めて限られた顧客を相手としていたことになる。住友銀行上海支店では少し状況は異なり、1920年前後の預金勘定口数は500口を超え、定期・当座・小口当座預金の各勘定とも100口以上になっており、諸貸出勘定でも50口を超えた。当座預金・当座貸越勘定が相当数に達していたことは、三井や三菱銀行上海支店とは異なった取引相手層を推測させるが、より詳しい検討は今後の課題である⁽³³⁾。

多額の外国為替金融と諸貸出に対応した資金の流れを各銀行の「営業報告書」

(32) 前掲、「報知付録」各号による。三井銀行上海支店の諸貸出の担当別構成をみても、信用・保証が圧倒的比率を示し、三菱銀行上海支店のそれが信用・保証以外に商品・有価証券・債券などと多様であったのと比べて際立った特徴を示していた。

(33) しばしば指摘されるように、この時期の上海における日本資本による事業投資は極めて旺盛で、1914年を100として、1931年には716.7となり、英米が2.3～2.8倍にとどまったのと対照的であり、その絶対額も2億ドルを超えた（前掲、『支那経済年報』昭和10年版、443ページ以下）。

からみておきたい。三菱銀行を除き店舗別貸借対照表をみておらず、また、三菱銀行においても本支店間の貸借関係は不明であり、さらに、各期末の数値に依存することになったから、期中の資金の流れも把握できていない。時系列で追及することも省略しているが、表5は各銀行上海支店の1918年末と1923年末（三井銀行は1922年末）の資産負債状況を概観したものである。主要勘定項目の列挙にとどめたので必ずしも十全なものではないが、店舗別貸借対照表から摘録した三菱銀行上海支店をみると、預貸率 E/A は100%を大きく切っていたものの、下欄の $M \cdot N \cdot O$ で分かるように、期末の N/M 、ないし O/M は100%を超えていた（但し、1923年末の N/M を除く）。三菱銀行の場合、多額の預金を抱えつつも、その運用は貸出より外国為替に傾斜しており、自店舗で吸収し

表5 三井・三菱・住友銀行の上海支店資金構造比較

(千円)

	三井銀行		三菱銀行		住友銀行	
	1918年下期	1922年下期	1918年下期	1923年下期	1918年下期	1923年下期
A 諸預金	1,645	1,767	1,087	2,905	1,926	2,733
B 売渡外国為替	1,378	2,307	66	83	1,888	29
C 本支店借	685	3,031
D 他店借	139	681	—	6	—	6
E 諸貸出	2,858	2,835	986	383	2,249	801
F 買入外国為替	2,690	1,537	350	822	1,875	224
G 利付為替	—	358	—	983	5	111
H 本支店貸	—	—
I 他店貸	646	874	67	2,331	22	632
J 現金預ヶ金	611	1,915	397	1,230	457	198
K 当期純損益	190	131	△19	△263	△190	△116
M A+B	3,023	4,076	1,153	2,988	3,814	2,762
N E+F+G	5,548	4,730	1,336	2,188	4,129	1,136
O E+F+G+J	6,159	6,645	1,733	3,418	4,586	1,334

(注) 各銀行の「営業報告書」による。—は該当なし、...は記載なし、△は赤字を示す。

た預金のみでは資金繰りは苦しく、かつ、再割引手形やインターバンク市場の未発達な上海金融市場の特徴としてかなり多額の現金預け金を恒常的に用意しておく必要も迫られ、OはMを大きく超過した。その差は本支店勘定で埋められねばならず、三菱銀行上海支店にはかなり他店舗からの融通資金が流れたと考える。住友銀行の場合は1918年と23年でその資金構造には大きな変化があった。前者の1918年は概ね三菱銀行と同様の説明で了解され则认为るが、関東大震災の影響もあったのであろうか、1923年は上海支店から他店舗への大幅な資金流出を考えないと同支店の資産負債状況は一致しない。あるいは、多額の有価証券所有があったかも知れない。

三井銀行上海支店の状況は三菱銀行や住友銀行上海支店と異なった特徴を示している。E/Aが100%を大きく上回ったように、三井銀行上海支店は貸出業務も活発であり、旺盛な外国為替取引による貸借を加えると、N/M、O/Mとも左辺が圧倒的な大きさを示し、相当量の本支店借で賄う必要があった。三井銀行上海支店の報告によると、1924年上期から1927年上期の期中借入各店勘定平均残高は360万円（1924年下期）から1,081万円（1926年上期）に達しており、上海支店に向けた多額の資金流入が継続的にあったことが分かる。⁽³⁴⁾

なお、付表1～3で各銀行上海支店の当期純損益をみると、多額の資金融通を得た三井銀行支店だけが黒字を計上し、三菱と住友銀行支店は赤字であった。⁽³⁵⁾ もう少し長い時系列でみても、三井銀行支店が黒字を計上しつづけ、1919年下期や1920年上期には百万円前後の純益をあげたのに対し、三菱銀行支店は1918年下期から24年下期までの13期（1921年上期の資料を欠く）で、黒字計上は1919年から21年にかけての各下期の3期分に限られていた。住友銀行は両者

(34) 前注(29)に同じ。

(35) 各店舗とも数多くの通貨を取扱って取引しており、期末ないし半期毎の決算報告の際には円貨による換算数値が採用されている。また、海関両1両に対する日本金円が1920年2円38銭から1928年1円53銭のように年次によって大きく変動しており、比較は或る程度「仮定」とならざるを得ない。三井銀行では相場変動の影響を除去するために、仮定の換算率を定めて円貨純益金を算出し、長期的比較を試みたりしていた（前掲、「昭和二年十月上海支店報告・営業概況」による）。

の中間に位置していた。また、各銀行の上海支店は本支店からの回金を得て資金繰りを付けていたから、三井銀行が企てたように、各店勘定の貸借に利息を付すとした試算を試みれば、各銀行上海支店の赤字幅は増大したであろう。

残された課題は多い。なによりも、各行上海支店の銀行業務をもっと詳細に跡付ける必要がある。それを通して、各行の外国為替金融への取組みの特色や日系企業その他の取引状況も具体化される筈である。また、各行の上海支店が上海金融市場で外国銀行や横浜正金銀行、さらには中国系銀行とどのような関係を取り結んでいたかを検討することも必要であるが、いずれも今後の課題としたい。

付記 資料の閲覧に際しては外交史料館（外務省）に随分とお世話になった。末尾ながら謝意を表わします。なお、本論文は科学研究費補助金「グローバル化下の国際通貨・金融システムの変容についての研究」（研究代表者 経済学部教授石橋貞男 平成15～17年度）および、経済学部研究ユニット「金融グローバル化」（代表者 経済学部教授今田秀作 2004, 5年度）による成果の一部である。

(36) 前注(29)に同じ。各行の上海支店が収益面でどの程度銀行全体のそれに寄与したかを推計することも難しいが、「営業報告書」の本支店別損益による限り1918年下半期で、三井銀行全体の純益金総額3,421,015円に対し上海支店の純益金は5.55%を占め、三菱銀行では純益総額1,211,499円に対し上海支店は僅か1.55%、住友銀行では純益総額1,653,364円に対し上海支店は△11.52%であった（ただし、漢口支店は黒字）。なお、課題と分析時期が少し異なるが、三菱銀行の支店展開については、岡崎哲二「三菱銀行の支店展開と資金循環1928～1942年」『三菱史料館論集』第3号、2002年、がある。

(37) 中国系銀行の外国為替金融市場への参入は余りなかったようであるが、日本の銀行を含め外国銀行への預け金などはみられた。中田昭一『『北四行』 聯合営業の形成に関する一考察——『南三行』との比較を中心に——』『名古屋学院大学論集 社会科学篇』36-1、1997年7月、同「華北における近代銀行業と銀号——日中貿易と華北金融業の展開」（曾田三郎編『近代中国と日本』御茶の水書房、2001年、所収）などを参照。

付表 1 三井銀行上海支店

(千円)

		諸預金	諸貸出	売 渡 外国為替	買 入 外国為替	利 付 為替手形	当期純益
1918 年	上期	1,341	2,791	408	594	—	7
	下期	1,719	3,070	1,378	2,691	—	190
1919 年	上期	5,943	11,246	630	2,201	3	423
	下期	2,136	5,705	269	3,795	495	916
1920 年	上期	3,106	1,849	1,150	2,568	72	1,028
	下期	1,104	1,293	399	1,367	0	不詳
1921 年	上期	2,557	5,195	842	6,240	2,951	475
	下期	1,415	2,979	1,479	3,258	382	574
1922 年	上期	2,015	6,479	2,691	8,320	151	710
	下期	1,769	2,835	2,307	1,537	358	131
1923 年	上期						
	下期	3,645	4,675	4,865	3,593	840	不祥
1924 年	上期	3,938	2,360	865	2,744	181	727
	下期						
1925 年	上期	4,575	5,031	3,033	11,695	130	753
	下期	3,257	9,481	334	2,231	387	531

(注) 各期「営業報告書」による。空欄は資料を欠く。

付表 2 三菱銀行上海支店

(千円)

		諸預金	諸貸出	売 渡 外国為替	買 入 外国為替	利 付 為替手形	当期純益
1918 年	上期	795	179	18	100	—	△28
	下期	1,087	986	67	350	—	△19
1919 年	上期					—	△58
	下期	2,420	859	34	3,234	—	92
1920 年	上期	3,430	452	0	464	1,049	△7
	下期	4,552	546	75	335	246	101
1921 年	上期	4,070	359	1	497	270	不詳
	下期	2,319	716	1	818	474	22
1922 年	上期	3,620	610	0	263	563	△71
	下期	5,983	418	388	127	968	△64
1923 年	上期	2,723	279	41	302	734	△102
	下期	2,906	383	83	822	983	△263
1924 年	上期	3,364	1,920	15	232	1,104	△22
	下期	6,297	1,499	45	2,319	393	△20

(注) 各期「営業報告書」による。空欄は資料を欠く。

付表3 住友銀行上海支店

(千円)

		諸預金	諸貸出	売 渡 外国為替	買 入 外国為替	利 付 為替手形	当期純益
1917 年	上期	509	2,058	733	1,332	75	3
	下期	823	660	169	1,432	1	△235
1918 年	上期	1,513	2,543	75	1,120	136	130
	下期	1,936	2,249	1,888	1,875	5	△190
1919 年	上期	1,057	3,201	1,338	2,161	165	△138
	下期	1,859	5,838	3,229	3,333	25	254
1920 年	上期	4,016	1,940	495	632	81	△30
	下期						
1921 年	上期						
	下期						
1922 年	上期						
	下期						
1923 年	上期						
	下期	2,733	802	29	224	111	△116
1924 年	上期	2,975	576	84	84	329	71
	下期						
1925 年	上期						
	下期	3,181	1,402	42	156	310	124

(注) 各期「営業報告書」による。空欄は資料を欠く。

付表 4 三井・三菱・住友銀行上海支店の外国為替取組み状況

(千円)

	三井銀行上海支店		三菱銀行上海支店		住友銀行上海支店	
	売為替	買為替	売為替	買為替	売為替	買為替
1917 年 上期					27,813	8,385
1917 年 下期					18,580	13,992
1918 年 上期	6,297	4,470	3,739	3,334	14,030	10,566
1918 年 下期	22,856	23,956	6,911	6,738	19,326	8,418
1919 年 上期	31,427	24,251	12,964	12,937	25,972	25,304
1919 年 下期	115,350	116,222	15,794	18,042	10,657	32,760
1920 年 上期	64,961	59,139	47,290	34,900		
1920 年 下期			19,277	19,366		
1921 年 上期	80,553	72,578				
1921 年 下期	92,153	90,433	30,785	29,588		
1922 年 上期	160,749	144,933	47,755	26,454		
1922 年 下期	92,005	91,784	34,177	37,188		
1923 年 上期			83,076	78,786		
1923 年 下期			96,866	97,351	49,296	36,803
1924 年 上期	155,543	133,996	77,715	80,026		
1924 年 下期			65,285	74,671		
1925 年 上期	270,245	250,183				
1925 年 下期	253,609	238,766			44,286	64,689

(注) 各期「営業報告書」による。空欄は資料を欠く。